

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653055

研究課題名（和文）「生き方死に方を考える社会フォーラム」形成のための社会実験

研究課題名（英文） Constructing a social forum for the discussion of good life and death

研究代表者

山中 浩司（YAMANAKA HIROSHI）

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：40230510

研究成果の概要（和文）：

研究期間中、一般参加者を含む公開シンポジウムを5回、専門家による研究会議およびシンポジウムを5回実施し、一般の方のべ440名、専門家の方のべ100名の参加があり、社会学、宗教学、医療、福祉、マスコミ、当事者による広範囲のネットワーク形成を実現できた。すべての公開シンポジウムと研究会議の一部はウェブサイト上で、ビデオ公開しており、社会的にも大きなインパクトがあったと考える。

研究成果の概要（英文）：

During the project we organized 5 symposia open to the public and 4 experts workshops on life and death issues, especially on terminal care for the old. These events had around 440 public participants and 100 experts participants altogether. We constructed a large network of people from various fields, sociology, religion, health care, welfare service, mass media and the parties concerned. Most of these events are video recorded and are released on our website.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	0	1,100,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,500,000	420,000	2,920,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ネットワーク、終末期医療、看取り、高齢社会

1. 研究開始当初の背景

研究期間の開始当初（2010年春）においては、ガンの終末期医療やホスピスなどの施設に対する関心は一般に高かったが、高齢者の終末期に対する関心はそれほど高くない。胃ろう問題についても記事数が激増するのは石飛幸三氏の『平穏死のすすめ』が出版されて以降である。高齢者の終末期における医療

やケアのあり方については、1990年代から周期的にマスコミ上でとりあげられているが、本研究の開始後に生じた変化はこの20年間のもっとも激しい変化であると推測する。変化の兆しは、研究期間の初年度（2010年度）の後半から始まり、この変化の火付け役となった石飛幸三氏をシンポジウムに招いた際には、すでに会場でもそれを強く感じら

れるほどになっていた。こうした状況において、当初、自殺問題やその他生き方死の方にかかわる広範囲の問題を扱う予定であった本研究も、胃ろう問題をはじめとする高齢者の終末期問題への参加者の非常に強い反応を見て、この問題に大きなウェイトを置くこととなった。

2. 研究の目的

本研究は、社会学、宗教学、医療関係者に強いネットワークをもつ研究分担者の共同活動を通じて、高齢社会における生き方死の方の問題についての社会フォーラムを形成することを目的とし、同時に、ネットワーク形成のありかたについて実験的に検証することを目的とした。

未曾有の超高齢社会を迎えた日本における終末期のあり方が、医療、福祉分野にとどまらず、宗教や家族や社会構造とも関連する複雑な問題となっているため、広範囲の専門家と現場や家族の当事者の共同作業が必要と判断した。当初研究の一部に含まれていた自殺問題については、NPO などとの連携を模索していたが、高齢者についてはむしろ介護施設などの福祉施設関係者との連携が有効と考え、一般公開シンポジウムにおいてそうした関係者の参加を促すこととした。また、有効なネットワーク形成のためには、密度の濃いコミュニケーションが必須であり、そのために、人数を限定的に制限する専門家会議をシンポジウムと平行して開催することとした。さらに、参加者のコミュニケーションやネットワークを外へ拡張し、開かれたコミュニケーションネットワークを構築するために、シンポジウムや研究会議の内容をビデオ録画し、これをウェブサイト上で配信することとした。これら三つの異なったネットワーク形成ツールによって、研究代表者と分担者がもつ既存のネットワークがどの程度拡大するのかを検証することも本研究の目的の一つである。

3. 研究の方法

上述のように、開かれたフォーラムを形成するために、一般参加者に公開するシンポジウムを5回実施した。

(1) 2010. 8. 7「終末期医療と人の死を考える」豊中千里公民館 (ゲスト: 恒藤暁氏、森岡正博氏、参加者約 90 名)

(2) 2010. 12. 19「平穏死について考える」千里ライフサイエンスセンター (ゲスト: 石飛幸三氏、参加者約 90 名)

(3) 2011. 3. 20「長寿社会と家族」千里ライフサイエンスセンター (ゲスト: 石飛幸三氏、参加者約 60 名)

(4) 2011. 7. 18「超高齢社会での生き方考える」千里ライフサイエンスセンター (ゲスト: 中村仁一氏、参加者約 100 名)

(5) 2012. 11. 3「病気になっても早死にしてみてもいい生き方」大阪大学中之島センター (ゲスト: 久坂部羊氏、中村仁一氏、参加者約 100 名)

上記のイベントはすべて専門の業者により録画されたものをウェブサイトにて公開済みである。

密度の濃いコミュニケーションによるネットワーク形成のために、少数 (20 名程度) の専門家のみによる研究会議を 5 回実施した。

① 2011. 3. 7「おひとりさまの老後とせずめの文化-在宅死のすすめ」京都大学楽友会館 (ゲスト: 上野千鶴子氏、参加者 20 名)

② 2011. 12. 24「幸せな死に方-仏教からの取り組み」京都大学楽友会館 (ゲスト: 釈徹宗氏、長倉伯博氏、参加者約 20 名)

③ 2012. 3. 1「オランダにおける安楽死制度について」関学梅田キャンパス (ゲスト: 牧田満知子氏、参加者約 20 名)

④ 2012. 6. 18「高齢者医療・終末期医療を考える」大阪大学中之島センター (ゲスト: 久坂部羊氏、石飛幸三氏、参加者約 20 名)

⑤ 2013. 2. 24「高齢者医療福祉政策を考える」大阪大学中之島センター (ゲスト: 堤修三氏、石飛幸三氏、中村仁一氏、参加者約 20 名)

上記のイベントの一部は録画をウェブサイトにて公開している。

ウェブサイトは、誰でも閲覧できるページとして、イベントの紹介ページ、ニュース、資料 (生き方死に方関連書籍、終末期医療関連書籍の紹介)、リンク (ホスピス・ビハラー関係、フォーラム講師関係、ガイドライン関係、胃ろう問題関係、死の質関連) を作成した。会員登録した上でのみ閲覧できるページは、各イベントのビデオ映像を収録している。ビデオ映像は、全体で 7 回のシンポジウムおよび研究会議を収録し、16 時間に及ぶ。

4. 研究成果

公開シンポジウムについては、毎回ほぼ会場が満席となる盛況で、5 回開催し、のべ 450 名の参加者を得た。シンポジウムや専門会議で関係を深めた専門家は、恒藤暁氏 (緩和医療)、森岡正博氏 (生命倫理)、石飛幸三氏 (高齢者医療)、中村仁一氏 (高齢者医療)、上野千鶴子氏 (社会学)、釈徹宗氏 (宗教学)、久坂部羊氏 (医師・作家)、堤修三氏 (政策研究者) など、終末期医療に関連する重要な発言を続けている医師、社会学者、宗教関係者、作家、政策関係者である。シンポジウムの開催を継起として、さまざまなネットワーク拡大が生じた。フォーラムには、マスコミ関係者、出版社からも参加は多く、交流と意見

交換はきわめて多岐にわたる規模となり、重要な社会フォーラムを形成したと考える。

公開シンポジウム、クローズドな専門家会議、ウェブサイトによる一般公開の三つの手法についてその効果を検証したところ、公開シンポジウムについては、すでに関係者がもっているネットワーク外への偶発的な広がりにおいて効果があった。ほとんどの参加者が会場において連絡先を記載し、その後事務局ともメールによるやりとりを行ったために、医療関係者、介護施設などの福祉関係者、高齢者を抱える当事者などのネットワークを形成することができた。専門家会議については、宗教関係、社会学関係、医療関係など既存のネットワークの拡充と強化に強い効果があったと考える。特に、従来は関係をもたなかった宗教関係者と医療者、社会学関係者と福祉関係者などが、こうした会議を介して関係をもついわゆるハブ効果があったものとする。専門家会議では、密度の濃いコミュニケーションが行われたため、会議参加者とは、相互により緊密に交流するようになった。また、こうした会議の参加者とのつながりを求める外部の関係者も多く、参加者の範囲は研究期間終了年度には格段に広範囲となった。

ウェブサイトの効果については、現在のところ検証が困難であるが、フォーラムの活動を紹介し理解してもらうためには、有効に機能しており、シンポジウムと研究者会議の補完的なものと理解できる。ただし、ビデオは収録された時間が非常に長く、また、閲覧のためには会員登録を必要とするため、閲覧者は非常に限定的であった（全体で数百件程度）。ウェブサイトの効果を高めるためには、会員登録の仕組み、ビデオの閲覧方法、ビデオ情報の公開など、改善が必要と考えるが、現状の予算ではこれ以上の改善を行うことができなかった。

期間中にわが国の高齢者についての終末期医療の社会的議論は激変し、特に、胃ろうと延命医療をめぐる社会環境は大きく変わった（平穏死に関する多数の著作の出版、関係者のマスコミへの露出頻度の激増、老年医学会によるガイドラインの公表、厚生労働省による通達など）。シンポジウムや専門家会議の参加者は、こうした変化を非常に強く感じており、日本の高齢者医療に重大な変化が生じるきざしを感じている。こうした流れに本フォーラムは重要な貢献ができたと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 山中浩司 「テーマ別研究動向（医療）」『社会学評論』63（2012）：150-165、査読有

② 阪本俊生 「デュルケムの自殺論と現代日本の自殺：日本の自殺と男女の関係性の考察に向けて」『関西学院大学社会学部紀要』112（2011）：7-18、査読有

〔図書〕（計6件）

① 大村英昭・井上俊編 『別れの文化―一生と死の宗教社会学』書肆クラルテ、2013、240ページ

② 石蔵文信 『男のうつ』日本経済新聞出版、2012、236ページ

③ 石蔵文信 『日本人が安心して死ねない 99の理由』大阪大学出版会、2012、150ページ

④ 石蔵文信 『夫原病』大阪大学出版会、2011、210ページ

⑤ 石蔵文信 『下痢ストレスは腸にくる』大阪大学出版会、2011、204ページ

⑥ 大村英昭・嵐山光三郎 『上手な逝き方』集英社、2010、208ページ

〔その他〕

ホームページ等

生き方死に方を考える社会フォーラム

<http://ikikata.heteml.jp/ikikata/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山中 浩司 (YAMANAKA HIROSHI)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：40230510

(2) 研究分担者

伊藤 公雄 (ITO KIMIO)

京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00159865

大村 英昭 (OOMURA EISHO)

相愛大学・人文学部・教授
研究者番号：30047485

阪本 俊生 (SAKAMOTO TOSHIO)

南山大学・経済学部・教授

研究者番号：30215652

石蔵 文信 (ISHIKURA FUMINOBU)

大阪大学・大学院医学系研究科・准教授
研究者番号：50303970

渡邊 太 (WATANABE FUTOSHI)

大阪国際大学・人間科学部・講師
研究者番号：80513142

心光 世津子

大阪大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号：60432499

古川 岳志

大阪大学・人間科学研究科・特任助教

研究者番号：50547007